

**令和7年度
学校推薦型選抜
文化学科
[言語文化系／地域文化創造系]
小論文
問題・出題の意図・採点評価基準**

令和6年11月16日

高知県立大学

問 次の文章を読んで、下の問いに答えなさい。

（配点 200点）

経済学者の井上智洋は「人工知能とベーシックインカムによる革命」という論文のなかで次のように書いている。

遠くない未来にユートピアらしきものがもたらされるとしたら、AIとBIの革命による以外にないものと考えられる。それは、政治的には今の民主主義体制と変わらないが、経済的には労働から解放されるという意味で、20万年前に人類が誕生して以来の最大の革命となる。

ここでAIは人工知能(Artificial Intelligence)、BIはベーシックインカム(Basic Income)の略である。井上は、これからの時代はAIとロボットが次々と人間の雇用を奪っていくことになるだろうと予想している。その新時代に対応する社会保障の仕組みとしてベーシックインカムを導入すべきだというのが井上の提案である。ベーシックインカムとは、政府がすべての国民(市民)に毎月無条件で一定額的生活費を給付する制度のことをいう。たとえば、政府が毎月7万円程度的生活費を全国民の銀行口座に振り込む、という風に。従来の生活保護とは違って、収入や財産、家族状況などに関する審査は一切なく、国民あるいは住民としての条件さえ満たせば、政府から個人に対して直接的に毎月一定の現金給付がなされるという仕組みが想定されている。

このAIとBIを組み合わせた社会設計こそが、今後われわれの目指すべき方向性であり、AI+BIの革命こそが理想的な未来社会をもたらす、と井上は考えている。つまり、AIとロボットをどんどん活用してそれらに「労働」を担わせ、人間は政府から毎月支給されるベーシックインカムによって「労働」せずとも生活していくことが可能になる。労働から解放されて、自由に好きなことをしながら生きていくことができる社会。これこそが、われわれの目指すべき未来社会のあり方ではないか、というのである。

オランダ出身の歴史学者、ルトガー・ブレグマンもこれとほぼ同様の提案をしている。今後、われわれはAIとの競争には決して勝てないのだから、AIやロボットに任せられる労働はどんどん任せてしまったほうが良い。その代わりにベーシックインカムの仕組みを導入することによって、人々は働かずとも生きていくことができるようになるのだから、失業を恐れることはない。とはいえ、何らかの仕事にたずさわりたいという人は多いだろうから、毎日3時間程度の仕事をして、残りは好きなことをして過ごす、というスタイルが一番良いのではないかとブレグマンはいう。これこそが21世紀を生きるわれわれにとっての「可能なるユートピア」であろうと。

たしかにこうした提案は、もしそれが実現できるのであれば、素晴らしいものであるように思える。これが実現できれば、われわれはもはや毎朝、満員電車で揺られながら通勤し、

嫌な上司のもとで長時間働く必要もなくなる。不景気の影響などで職を失う心配もしなくて良い。遊ぶことが好きな人はずっと遊んでいても良いし、音楽や演劇やスポーツなど、追いかけていた夢がある人はそれに向かって努力し続けることもできる。もちろん、毎月7万円程度の支給額だけでは満足のできる生活ができないという人も多いだろうから、そうした人はこれまで通りに働き続けても良い。ベーシックインカムによって最低限の収入は保証されているので、それに加えてどれだけ働くかは、それぞれのライフスタイルや人生プランに応じて自由に選ぶことができる。職を失うことへの不安も減るだろうから、無理な働き方をするブラック企業などはどんどん人が辞めていき、優良な企業だけが生き残るだろう、という期待もある。

このように書き連ねていくと、ベーシックインカムは夢のような理想の仕組みであるように感じられる。むしろなぜどの国でもまだこの仕組みを導入していないのか、と不思議に思われるほどかもしれない。しかし、井上やブレグマンが提唱する⁽¹⁾「AI+BIによる革命」は本当に理想的な未来社会をもたらすのだろうか、というのがここで考えてみたい問いである。言いかえれば、それは「労働から解放」されたときに人類ははたして幸せになることができるのだろうか、という問いでもある。ここではケインズの未来社会論を参照しながら、「労働と余暇の未来」について考えていきたい。

（中略）

資本とテクノロジーの進歩によって、労働から解放されることは「果たして良いことなのだろうか？」とケインズは問いかけている。「額に汗して働き、その日暮らしを続けているものにとって、余暇は長年の夢だが、実際に暇ができると夢から覚める」。多くの人々は、労働から解放されたいと願いながら、実際に労働から解放されるとなると、一体何をして良いのか戸惑ってしまうだろう、とケインズは予想していた。このような⁽²⁾「暇と退屈」の問題こそが将来世代にとっての最大の課題となるであろうと。

出典：百木漠「労働と余暇の未来—ケインズの未来社会論を手掛かりに」、『フューチャー・デザインと哲学 世代を超えた対話』西條辰義・宮田晃碩・松葉類編、勁草書房、2021年

（出題の都合上、出典の文章の一部を省略・改変した。）

注：

ケインズ…ジョン・メイナード・ケインズ（1883～1946年）。イギリスの経済学者。

「暇と退屈」…國分功一郎『暇と退屈の倫理学』（朝日出版社、2011年）の書名からの引用。

問1 下線部(1)「AI+BIによる革命」とは、どういうことか。本文に即して、200字以内の日本語でまとめなさい。

(配点 100点)

問2 下線部(2)「「暇と退屈」の問題こそが将来世代にとっての最大の課題となるであろう」とあるが、本文の内容をふまえて、このことに対するあなたの考えを400字以内の日本語で述べなさい。

(配点 100点)

<出題の意図>

問1 人工知能とベーシックインカムを手掛かりに「労働と余暇の未来」について書かれた課題文を正確に読み取ることができているかどうかを見る。

問2 課題文の内容に基づいて、人工知能とベーシックインカムによる「労働からの解放」がもたらす余暇の過ごし方の問題を、論理的に記述する能力を見る。

<採点評価基準>

問1 次の点を見て評価する。

- (1) 課題文の内容を正確に理解することができているか(読解力)。
- (2) 筆者の考えを、適切な文章で表現できているか(文章表現力)。

問2 次の点を見て評価する。

- (1) 課題文の理解に基づいて、論述できているか(読解力、知識・理解力)。
- (2) 自分の意見を、論理的かつ的確に表現することができているか(論理的思考力、文章表現力)。